

青春の

その奥へ

目次

一	快樂のその先へ	7
二	背徳は甘美な蜜の味	49
三	淫蕩の宴 ～徹夜明けの二人は 汗だく種付け交尾しきたくない～	81
四	超天才清楚系病弱美少女は いちゃらぶえっちの夢を見るか	121
	あとがき	168

一 快樂のその先へ



「イグイグイグやばいぐっ♡ほんとにイグうううああああ♡おとおお♡♡んおっ♡
♡待って待って♡待ってえ♡♡ほおおおお……ッ!?おッ♡助けッ♡うおオオオ
……ッ♡」

目の前でユウカちゃんが嬌声を上げている。

むっちりとした脚をV字に広げさせられて先生に組み敷かれている彼女が、いつもは表情が豊かで可愛い顔をぐちゃぐちゃに歪めて泣き叫んでいた。

助けを求めるように私へと伸ばされた手を先生が掴む。快楽から逃げ出せないように押さえ込まれて、柔肉を跳ねあがらせ悦びの悲鳴をあげた。

「ユウカ、どうかな。このパッキンパッキンに芯の入ったチンポ。いつもユウカがムッチムチのぶっといふともをぶりんぶりんさせながらシャーレに来るものだから、いつもチンポに芯が入り切っちゃって痛いんだ。見せつけているせいで、いつもキンタマはぐっぐつユウカに注ぐための精液を作り始めてたっぶたぶになって重たいんだよ？ シャーレの業務を手伝いに来てくれているのに、逆に業務妨害になっているって気づけない？ だからこれはおしおき。ちゃんと責任を取ってまんこでご奉仕して」

いつもと変わらずにこやかな柔らかない笑みを浮かべる先生。でも、その口調と下半身の動きは彼の表情とは正反対に、目の前のメスを屈服させる荒々しさを持っていた。

「……♡あ、っ♡あぐっ♡ま、待って♡せんせっ♡あっ♡ごめ、ごめんなさっ……!♡♡イ、

グう……！♡♡

「こら、腰を逃がさない」

先生が逞しい身体でユウカちゃんを組み敷いて、容赦なく的確にユウカちゃんのおまんこの弱点を突き崩していく。

静止を求める声には耳を貸さず、ここでトドメを刺してやると言わんばかりの執拗な動きで一ミリの狂いもなく全く同じ場所を擦りあげるように、女の最も弱い部分を騷るように痛烈なピストンを繰り返す。

一突きするたびにイキ潮を撒き散らすユウカちゃんの身体は大きく飛び跳ねる。そのたびに大きなお胸がダイナミックに揺れ弾み、その光景がまた先生の嗜虐心を滾らせてさらに激しい一撃がユウカちゃんに叩き込まれた。

「あっ♡あっ♡あっ♡あああっぐうひいっ♡ふぎゅ、んっぎいいいあひいっ♡ひいっ♡ひい♡ひいひいひい♡ま、ましゅ、んひいひい♡まつへ、まつへくらひやつおご♡♡こ、こりえ、ひ、ひにゅっ♡しんじやいまひゅうつ♡」

「大丈夫だよ、気持ちよくて死ぬことなんてないから」

もはや喘ぎ声というよりは悲鳴のような声をあげながら命乞いのような懇願をする彼女に、先生はニコリと笑うだけで腰の動きを止めることはなかった。

むしろその悲痛な訴えを耳にしたことで、さらに激しく動きを加速させていく。スパートを

かける先生と、身体を震わせてイキ狂うユウカちゃん。そして、それを呆然と見つめている私。
 ぶしゅッ♥ぶしゅッ♥とユウカちゃんのイキ潮が私の顔に掛かる。先生の強烈なオス臭漂う
 先走りが私の鼻先を掠めた。

そろそろ終わりが近い——そう思った矢先にユウカちゃんの身体が大きく弓なりにのけぞった。先生がひと際強く、腰を打ち据える。

ぶぶびゅぶぶぶつつ♥♥♥♥♥びゅぶつつ♥♥♥ぶびっ♥♥♥ぶびっ♥♥♥びゅりゅるぶぶ
 っ♥♥

「あああっおおおおお♥♥♥♥♥ あっ……、おおおおお、いっぐうう……っ、あああ♥♥♥
 あああああ、っ……♥♥♥ おおおおあっ……んひつつあああああッ♥♥♥んをつ、ほっ
 おおおおおおお♥♥♥ おおおおお♥♥♥♥♥ つっ……♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

濁流のように吐き出される白濁の雄汁が怒涛の勢いでユウカちゃんのおまんこに注がれる。
 射精の音が聞こえてくるかのような勢い。いや、もしかしたら聞こえていたのかもしれない。
 ユウカちゃんの可愛らしい顔が白目を剥いて、だらしなく舌を放り出しながら涎を垂らす。
 先生の逞しい身体を股座に迎え入れていたことでガニ股になっていたなっていた両脚も、反射
 的にまっすぐと伸びていた。

どれだけ時間が経っただろうか。一分だったかもしれないし、十分だったかもしれない。
 時間の感覚さえあやふやになりそうなほどに濃密な射精が終わり、先生が息も絶え絶えな状態

のユウカちゃんからゆつくりとおちんぼを引き抜く。

あれだけの射精だったのだから、普通なら萎えるどころかしばらくは腰砕けになっていてもおかしくはない。それでも——ユウカちゃんのおまんこから引き抜かれた先生のおちんぼは、全身を精液と愛液でコーティングさせながら天高く上を向いていた。

「お待たせ、ノア」

蕩けるように甘い笑みを浮かべた先生が、私のベッドに移動する。

ぐったりと力の抜けた私の身体は、動かすことができない。このまま目の前の屈強なオスに捕食されるだけの哀れな弱いメス。いまだにぶびゅつぶびゅつ♥と先生からいただいた白濁液を垂れ流し続けるまんこが、こつてりとした本気汁をどろりどろりと溢れ出させた。

先生が私を軽々と抱きかかえる。力強い腕。先生のカッコいいお顔がすぐ傍にある。もう、私は先生に負けていた。屈服させられていた。先生のイケメンヤリチンでかちんぽに——
食い散らかされることしか考えられなくなっていたのだった。



——きつかけは、私に芽生えてしまった出来心だった。

だからこれは自業自得で、巻き込んでしまったユウカちゃんには少しだけ申し訳ない気持ち

もある。でも、きっと彼女だって先生のが好きで——いつかこうしてもらうことを夢見ていたのだから、結果的には良かったのかもしれない。

ユウカちゃんは内緒にしているかもしれないけれど、『だめ、だめです……っ♡ 先生っ♡ そんな無理やりい……っ♡ うお……っ♡ ちんぽつよお……っ♡ 負ける……っ♡ ちんぽにおまんこ負ける……っ♡ おお♡♡ ちんぽに負ける妄想しゅごい……っ♡ まんこにキぐっ♡♡♡』って、ヘコヘコ枕に腰を押し付けているのを見たことがあるのだから。

先生から乱暴に、強引に求められたい。自分の肉体を欲望のままに貪られたい。セックスで身も心も支配されたい——そんな浅ましい妄想を、私もユウカちゃんも、きつと胸の奥に秘めていたのだから。

——だから、これは私たちの、自業自得なのだ。

『マッサージ、ですか？』

『うん。また効果のありそうなものを習ってきたんだ』

シャーレの当番の日、肩をぐるぐると回して、首を捻りながらボキボキと鳴らしていた私に先生がそう声を掛けてくれた。

日々のデスクワークで凝り固まってしまった身体は、確かに至るところで悲鳴を上げていた。頭の芯に鉛が入ったかのように重く、座りっぱなしの下半身はガチガチに強張っている。正直疲労の限界だった。

一度だけ先生のマッサージを受けたことがある。なんでも本職の整体師に習ったのだという腕前は確かなものだった。肩をほぐしてもらった後、嘘のように身体が軽くなったのを覚えている。

『先生？ これは、少々……生地が薄いのでは……』

『水着の上から施術する時もあるから、あまり邪魔にならないようにしているんだ』

『そう、なんですか……？』

オイルマッサージ。良い香りのするオイルは気分をリラックスさせてくれるらしい。

そうして始まった先生の手技。全身の疲労が溶けてなくなってしまうような感覚。先生の手が気持ちの良いところを揉みほぐし、快樂の沼へと沈んでいく。

ため息が漏れてしまうくらいの気持ちよさに、靄がかかったように思考が鈍くなる。先生の手がきわどいところを責めるようになって、あまりの快樂に抗うことができなくなっていた。

『もっと、気持ちよくなりたい？』

——だから、なのだろうか。

『……………はい』

これ以上気持ちよくなってしまうたら……どうなってしまうのだろうか。私の記録にもないほどの快樂。先生にこれ以上気持ちよくされてしまったら——私は、どんな痴態を見せてしまおうか。

そんなほの昏い欲求が脳裏を掠めてしまったのだ。

『ノア、かゆいところはある？』

本当はその手前で先生を止めるべきだったのだ。先生の手によって何度も何度も絶頂を迎え、ドロドロになってしまったおまんこに先生自身をいざなうことになる前に。

『ほっ♡ ほっ♡ ふとお……♡ あっ♡ イっ……♡ あっあっ♡ せんせっ♡ だ、だめです♡ イキまっ♡♡ ほおっ♡♡ ほオオッ♡♡ ほおおっほおおっ♡♡♡♡』

記録どころではないほどに乱れて、ぐちゃぐちゃになった姿を先生に晒すことになるなんて――その時の私は、想像すらしていなかったのだ。

『うんうん。かゆいところは全部搔いてあげるからね』

先生のおちんぽがゆっくりと時間を掛けて膣内を往復する。二十センチを超えるほどの先生のでかちんぽ。段差が三センチを超えるカリ首が、私の膣をゴリゴリと削っていった。

先生が腰を打ち付けるリズムミカルな音が部屋に響く。一定の規則的なリズムが私をどんどんと高みへと昇らせていく。

『んんっ、イクっ♡ イっく♡ イクっ♡ 待っ♡ あっあっあっ♡ イっあっ♡ あっあっおっおっおっ♡♡ まっ♡ いっかいやめっ♡♡ おっおっおっ♡♡ おおおっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡』

『イキたい？ じゃあ、これからは協力してもらおうかな。いい？』

一突きごとに肺の中の酸素がすべて吐き出されて、引き抜かれるたびに内臓がすべて持っていかれそうな感覚が私を襲う。ぽこつと膨れ上がったおなかには先生のおちんぼのカタチがくつきりと浮かんでいた。

快樂に支配されてしまった私の脳には、先生からの要求を拒むような余力は残されていないかったのだ。

『きよ、きょうりよくしますっ♡ おっ♡ おほオッ♡ ほっ♡ オッ……♡♡ イ……ッ、イぎゅッ♡♡ おオッ♡♡ ンおオオ……ッ♡♡♡』

先生のでかちんぼに耕されて屈服した私のおまんこが、降参の証として本気汁を涎のように垂れ流す。親友を目の前のオスに差し出してしまったことなんて、とつくに私の頭からは消え去っていた。

ドロリとした粘度の高いマン汁が、栓の壊れた蛇口のように膣奥から溢れ出す。まるで杭を打つように容赦なく叩きつけられる本気ピストンに、声が枯れてしまうくらい泣き叫ばされてしまったのだった。

『んあッ♡♡ ほオっ♡♡ イグッ♡♡ イグッ♡♡ イッ——あアアアアああああアああアああアああアアあアあアあアあアあアあッ♡♡♡♡♡♡♡』



「ほ、本当に大丈夫なんですよね!？」

「うん、大丈夫大丈夫」

「それにしてもこんな格好……うう……」

モジモジ恥ずかしそうに身体をくねらせるユウカちゃん。動くたびにムチムチとはみ出したお肉が震えて、逆にえっちになっていることに気が付いていないのだろう。

上下とも細い紐で繋がれただけの際どい白ビキニ。上はかろうじて乳輪を隠せて——あ、ふふ。ユウカちゃんのは私のよりも大きいから、少しだけ端が顔を覗かせているみたいですね。下もほとんど紐だけのブラジリアンスタイル。大事なところをギリギリで隠せているだけで、鼠径部のラインは完全に見えてしまっている。「リンパが溜まりやすいところだから」というのが先生の常套句だった。

布地も薄くて、うっすらとピンク色が透けてしまっていた。自分の胸を抱きかかえるように隠そうとするユウカちゃんは、そのせいでお胸を強調してしまっている。羞恥で赤らんだ肌と合わせて、同性の私から見てもとても扇情的だった。

「ほら、ノアも同じ格好してるから」

「ふふっ。恥ずかしいのは最初だけ、ですよ」

先生が私に水を向ける。ユウカちゃんを安心させるようにわざとらしく胸を張ってニッコリと笑みを浮かべた。ぷるん、と震えた胸。水着の下の乳首が痛いほどにシコリ上げていること



は、バレていないだろうか。

濡れてしまったては、水着が透けてしまうことがバレてしまう。そんな緊張感を抑えながら、努めていつも通りを装った。

「の、ノアがそう言うのなら……」

「ごめんね、ユウカ。オイルも使うから、なるべく布面積が少ない方がいいんだ」

首を傾げながらも「先生までそう言うなら……」とユウカちゃんが渋々自分を納得させた。でも、わかりますよ、ユウカちゃん。とつても恥ずかしいですよね——そう、自分の時のことを思い出した。

あの時も、この水着だった。不思議なことにサイズが着られるギリギリで、胸が零れ落ちてしまいそうなことを気にしていたのをよく覚えている。

軽い気持ちで受けようと思っていたマッサージが、予想以上に大掛かりなものだったこと。そして、自信に満ち溢れた表情でそれらしいことを語る先生の口車に私は乗せられてしまったのだ。

「の、ノア……本当に、大丈夫なのよね……?」

「ふふっ。大丈夫ですよ、ユウカちゃん。先生のマッサージ、とっても気持ちいいですから」不安そうに私のことを見つめるユウカちゃんに、もう一度ニッコリと笑みを向けた。親友に嘘を吐いてしまっているという罪悪感が胸をチクリと痛ませる。

それでも、私は知りたかった。先生の手によって、ユウカちゃんがどれだけ乱れてしまうのかを。えっちなことだと知らないまま、快樂に身を任せていくユウカちゃんの、快樂に溺れていく姿を知りたかった。

——それに、ユウカちゃんも望んでいることだと思えますよ。

ユウカちゃんも、私と同じ想いを先生に抱いているのだから。

「じゃあ、まずうつ伏せになろうか」

仮眠室にはぷうくんと甘い匂いが漂っていた。先生特製のアロマだ。気分がリラックスしてそう、う、気分にはささやすくするもの。

大きめのタオルを敷いたベッドに横たわるように促されて、ユウカちゃんがゆっくりと腰を下ろした。

そのまま、おそろおそろ身体をベッドへと乗せていく。私は「大丈夫ですからね」とユウカちゃんに声を掛け、隣のベッドに腰を落とした。

大きく張り出したヒップラインは、綺麗な曲線を描いている。「最近お肉が付いてきたの」なんてユウカちゃんは言っていたけれど、うつ伏せでも垂れずに綺麗な形を保っていた。

「さっそくだけど、オイルを使っていくね。くすぐりたいとか、痛いとかあったら、遠慮なく言って」

「は、はい……ひゃっ」

良い香りのするオイル。少しひんやりとした液体が、先生の手によってユウカちゃんのふとももに塗られていく。

急に肌に触れた冷たさに、ユウカちゃんが身を振らせた。大きなお尻がユウカちゃんの動きに合わせてプルプルと柔らかそうに震える。

「うーん、ふとももは結構張ってるね」

「そ、そうですか？ 座り仕事が多いからでしょうか……。最近ストレッチはよくしているのですが」

「ふふっ。寝る前、一緒にやってますよ」

——脚痩せのためのヨガストレッチとヒップライン維持のためのスクワット。一生懸命やっていた成果を、今一番見せたかった人に見せられていますよ。

でも実は、ユウカちゃんのほどよくむっちりとした身体が、先生の一番好みの体型だということ、あえて黙っていた。

「疲れが溜まっているのかもね。ノアもそうだったし」

「……ふふ、はい。座ってばかりなので、どうしても下半身は凝ってしまうんだと思います」

「じゃあ、ちゃんとほぐさないと……ねっ」

さらにオイルを手を取った先生が、ふとももをググーッとお尻の方に向けて揉み上げていく。「ちよっと強めにやるね。リンパを流して、しっかり老廃物を流していかない」と

「あ……気持ちいい……」

「痛かったら言ってるね」

「はい……」

ユウカちゃんの目が少しトロンとしてきた。気持ちよさそうに細められた目。もみもみとほぐすように先生がふくらはぎを揉む。

——始めはちゃんと、気持ちいいんですね。

そんなことを思う。私の場合は上半身からだった。

ユウカちゃんよりも、ほんの少しだけ大きい胸。そのせいなのか、肩こりが酷くてちょっと困っていた。

先生にしてもらった施術で癒着した肩甲骨を剥がしてもらってからは、すこぶる調子がいい。シてもらっている最中もとても気持ちがよくて——だからこそ……疑問を覚えつつも、拒むことができなかったんだと思う。

「他にはどこがある？」

「デスクワークばかりだからか、肩が結構凝ってる」

「ふふ、ユウカちゃんはお胸も大きいですからね」

「こ、これでもダイエットしてるんだから！」

他愛もない話をして、徐々にユウカちゃんの警戒を解いていく。その間も先生の手は彼女の

ふくらはぎをマッサージし続けていた。

「うーん、ユウカはそのままでも十分スタイルいいと思うけど」

「先生、女性にはいろいろあるんですよ」

デスクワークでむくんだ脚をこうして解してもらうのは思ったよりも気持ちがいい。ユウカちゃんもリラックスしたみたいに笑みを浮かべている。

このマッサージには脚痩せの効果もあるんだよ、と説明する先生に食いつくユウカちゃん。お尻の際の方にまで先生の手が伸びていることに気が付いていなかった。

「私、胸から落ちてっちゃうタイプだから……」

「ふふ、先生は大きいお胸の女性がタイプですからね」

「そ、そんなこと……ないことも、ないけど」

普段は絶対に口にしないようなことも、リラックスした今なら曝け出せてしまうのだろう。普段なら「セクハラですっ」と顔を真っ赤にするユウカちゃんも笑顔混じりで談笑に加わっていた。

「ちよつとずつ上の方もやってくね」

「ひゃっ」

ユウカちゃんの背中にオイルを垂らす。冷たさにびっくりしたのか、ユウカちゃんの身体が少し震えた。

先生の手がオイルを背中に満遍なく塗っていく。背骨に沿うように指が通り過ぎていくと、気持ちよさそうな吐息がユウカちゃんの中から零れた。

「じゃあお尻にも塗ってくね」

「はい……」

先生の手がユウカちゃんのお尻に触れる。ハリのある大きな肉丘を、先生の大きな手が揉み込むように撫でていく。普段のユウカちゃんなら怒り出すところだろう。でも、今はその警戒心が解かれてしまっていた。

先生の五本の指が尻肉に食い込んで、グニグニ形を変えていく。ぶるぶると尻たぶを揺らすようにマッサージを加えると、波立つようにユウカちゃんのお尻が揺れた。

お尻とふとももの境目に先生の指が埋まっていく。強張っているお尻の筋肉がほぐれているのだろう。ユウカちゃんの口からは蕩けそうな吐息が漏れた。

「じゃあちよつと膝を曲げてね」

「えっ……あ、その」

「痛い？」

「そ、そういうことではないんですけど……これ、見えてないですか？」

先生の手がユウカちゃんの両膝を掴んで外側に向けて曲げようとする。カエルのような脚の開き方。そうすることでそれまで尻たぶで隠れていたユウカちゃんの大事なところが、先生の

前に晒されてしまった。

頼りない水着に隠された大事なところ。これまでのマッサージが気持ちよかったのか、少しだけ水着が湿り気を帯びていた。

私の目からは、水着の端から少しだけはみ出したピンク色の土手——大陰唇がバッチリ見えてしまっていた。

「大丈夫だよ。ちょっとだけ際どいところを触るかもしれないけど、リンパってのはそういうところに溜まるものなんだ……嫌だったら言ってるね。すぐに止めるから」

「私もしてもらいましたけど、とーっても気持ちいいですよ」

「そ、それなら……」

先生のそれらしい解説とユウカちゃんへの気遣いを含んだ優しい声音。私からのお墨付きもあってか、ユウカちゃんが半信半疑ながらも両膝を外へと曲げる。

——嘘は、言っていないですよ。とても、気持ちいいですから。

先生の太くて長い指が、私の大事なところをぐちゅぐちゅとかき混ぜる——その快感を思い出して、私のおまんこもじゅん、と湿り気を帯び始めていた。

「えっ、そんなところも——」

「ここが一番リンパが詰まるんだ」

先生の手がユウカちゃんのお尻の内側に触れる。おまんことお尻の境目。オイルを擦り込む

ように上下に動きながら、ものの付け根のきわどいところまで手が伸びていた。

お尻全体を揉むように先生の手が這いずり回る。Iラインにまで指が伸びて、ユウカちゃん
の身体がそのたびにビクビクと震えた。

「え、本当に大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だよ。ノアもやってるから」

「はい」

こそばゆい感覚を我慢するように、ユウカちゃんが眉間に皺を寄せる。オイルでテラテラと
光ったお尻が淫靡な光を放っていた。

先生の手がお尻の穴を掠めるように流れていく。グッと尻たぶを持ち上げられて、ストンと
落とされる。

—— ああ、私もあんな風にされていたんですね。

ぐにぐにと尻たぶを広げて閉じてを繰り返されて、お尻の穴がくぼくぼと広がるようなゾワ
ゾワとした感覚が背中を駆け上ったのを覚えている。

「やつ……せ、先生？」

「大丈夫。私を信じて」

身体の下に潜り込んだ先生の手が、鼠径部に沿って前側にも伸びてきた。ちょうどVゾーン
の辺りをグググッと執拗にマッサージする。

何回も何回も鼠径部のラインに沿って行き来する先生の指に、たまらずユウカちゃんが顔を枕に埋めた。耳まで真っ赤に染め上げて、なにかをこらえるようにしている。

「ちょ、ちよつと……そ、こつ、ばっかり……ッ」

「ここが一番、リンパが溜まっている場所なんだよ」

気持ちよさを我慢するように口に手を当てて、ピーンと足を突き出した。ビクビクと身体を震わせている。

逃げようとお尻を高く上げるけれども、それが逆にマッサージをやりやすくさせてしまっていることに、ユウカちゃんは気が付いているのだろうか。

突き出すように高くあげられたお尻。身体を振ったことで食い込んだ水着からは、お尻の穴の外周部がくつきりと見えてしまっていた。

「気持ちいいと思える方が、女性ホルモンが活発になって効果があるんだよ」

突き出されたお尻を撫でまわす先生の手。尻たぶと土手の間をスリスリと擦られて、ユウカちゃんがぐねぐねとお尻を振り回した。

先生の指がユウカちゃんのお尻の穴を掠める。羞恥に顔を真っ赤に染めたユウカちゃんが、耐えるように唇の端を噛み締めている。

「やっ♡ あっ♡ あっ♡」

「気持ちよかったらそのまま我慢しないで声を出していいよ。その方が女性ホルモンが活性化

して、もっと綺麗になるから」

ユウカちゃんの口から甘い声が漏れる。慌てて口に手を当てるけれど、誤魔化しようがない嬌声だった。

「ふ……っ、うんっ……♡」

先生の手がユウカちゃんの大きなお尻を撫で回し、鼠径部を愛撫していく。決して直接陰部に触れているわけではないのに、まるで身体全身が性感帯になってしまったかのように気持ちがいいのだ。

でも、決して絶頂には届かない。甘い快樂がさざ波のように押し寄せるけれど、頂上に届く前に波が引いてしまう。絶頂の入り口で焦らされているような感覚が常に襲っている状態だ。ユウカちゃんの荒い息が聞こえる。蕩けそうなほどに甘い声。いつのまにか私も、自分の手で自分のおまんこをぐちゅぐちゅと弄りだしていた。

「大丈夫かな？」

「だい、じよ、うぶ、です……」

下半身のマッサージが終わって、半ば放心状態のユウカちゃんに先生が声を掛ける。余韻に震えるユウカちゃんが、モソモソと身体を起こした。

口の周りに付いた涎が気になったみたいで、何度も口を拭っている。

「も、もうおわり……ですか……？」

「ううん。今度は座った状態で施術していくからね」

ベッドの端に腰掛けたユウカちゃんの背後に先生が回り込む。ギシッとスプリングの軋む音が部屋に響いた。

「ち、ちかくない、ですか……？」

「そうかな？ でもこうしないとマッサージができないから」

ピッタリとユウカちゃんの背中に張り付くように腰を下ろした先生がなんでもないかのようにそぶく。

きつと、不安そうな表情を浮かべるユウカちゃんの背中には、先生の熱くて硬いモノが押し当てられているのだろう。先生のカッコいい顔がすぐ傍にあるからごまかされているけれど、おちんぼを意識させるためにわざとしているのだ。

ユウカちゃんは落ち着かない様子でもぞもぞと座る位置を変えて逃げようとするけれども、その動きに合わせるように先生も身体の位置を微妙に変える。

結果として、ユウカちゃんが自分で先生のおちんぼに腰を擦りつけているようなカタチになってしまっていた。

「じゃあ。始めるね」

先生の手がユウカちゃんの肩を揉む。そして、首筋から肩、二の腕をぐにぐにと揉みほぐした。先生の手がお腹へと回ってくる。恥ずかしそうに俯くユウカちゃんに胸を張るように促した。

ハリのあるお胸がツン、と全面に押し出されている。水着越しに、ピンク色の綺麗な乳首がうっすらと透けてしまっていた。

「じゃあ、腕を頭の後ろにやって。腋のリンパ節をほぐしていくからね」

「せ、せんせ……このかつこ、はずかしい……」

「ここをほぐしてあげると、バストアップ効果がすぐあるんだ」

両手を頭の後ろにつけて、グツと胸を張る。綺麗な腋が私の前に現れた。先生が窪みをグリグリと親指で指圧する。

くすぐったそうに身を振らせるユウカちゃんの腋から脇腹へ。先生の手がゆっくりと下りていく。お胸の横を掠めるように流れていく手が、ユウカちゃんのお胸をぶるん、と揺らした。先生の手が徐々にユウカちゃんのお胸の輪郭を捉えていく。少しずつ少しずつ、横や下を指の先で掠めるだけの動きから、お胸の側面を撫でるような動きへ。腋やデコルテをマッサージしつつ、少しずつお胸を触る回数を増やしていく。

「満遍なくオイルを塗っていくからね」

「……ふあい」

とろん、とした目。先生の指が、もうほとんどユウカちゃんのお胸を触っていることに気が付いていないようだった。

お胸を下から持ち上げるように揉み込んで、チラリと覗いている輪に沿って指が動く。鎖骨

から胸の周りを際どくなぞるようにおりてきた手が、ついに水着の中に侵入した。

「せんせつ、な、なかに、はいっていませんか？」

「満遍なく塗らないといけないからね。ちよつとだけ我慢して」

小さな三角形の下にまで、先生の指が入り込んできた。オイルの付いた両手でもみくちゃにされて荒い息を吐くユウカちゃん。乳首に触れるか触れないかの位置で焦らすように、先生の手が縦横無尽に動き回る。

「やん、せんせ、その……、」

「後ろからは見えてないから、大丈夫大丈夫」

もはや水着がズレて完全にユウカちゃんのお胸が露出していた。当然、後ろから覗き込んでいる先生の目からも見えている。そんなことを気にもしない先生の指が、ユウカちゃんの乳首を掠めるように胸を揉む。

中指と薬指の間を乳首が擦り抜けて、十本の指によってお胸がむにょむにょと柔らかく形を変えていく。

下からプルプルとお胸を揺らされて、波打つように左右のお胸が震えた。

「ゆ、ゆらさないで……っ」

「筋膜剥がしつていうんだ。これが効果あるんだよ。こうやって交互に揺らしてあげると……胸が上向きやすくなるんだ」

「ん……♡ ふ……う♡」

そう言いつつ、先生は胸を絞るように中心に向けて揉み込んでいく。ユウカちゃんの息も、また上がってきた。胸を押さえようとするユウカちゃんの腕を下ろし、たばたと弄ぶように胸を揉み込んでいく。

すでに水着は胸の上へと押しやられて、ユウカちゃんのぷつくりとした桜色が顔を覗かせてしまっていた。

「足の裏を合わせてみて」

「は、はずかしい……」

「大丈夫」

胡坐のような体勢でユウカちゃんがベッドの上で足の裏を合わせて座る。大股開きになった鼠径部を先生の手が這いずり回った。

水着越しにおまんこを撫でられて、その手から逃れるようにユウカちゃんが前屈みになる。そのたびに背後から先生の手が伸びてきて、ピンと背筋を伸ばさせられていた。

「ここも……すぐ凝ってるね」

先生が乳首の先端を掠めるように触っていく。もはやマッサージなどではなく愛撫のようなフェザータッチ。ピクピクと痙攣するユウカちゃんを尻目に先生の指が乳輪をぐるぐると這いまわっていた。

「もう邪魔だから、取っちゃおうか」

先生がユウカちゃんの水着を外す。くにくにと乳首を弄り、突き、ぷっくり膨らんだ桜色を執拗に責める。

『きゅふつつ♡♡♡♡♡』

ついに先生の指がユウカちゃんの乳首を摘まんのだ。クリクリと乳首をシコリ上げ、ビクビクと小刻みに身体を震わせるユウカちゃんには浅い快楽の波が押し寄せているのだろう。

さんざん焦らされて感覚が研ぎ澄まされたソコを指の腹で押しつぶされ、バチバチっと火花が散ってしまったのだろうか。じゅわああと水着の下が湿っていく。乳首を捻られたただでこんなにもイッてしまうのが初めてだと言わんばかりに、ユウカちゃんは目を白黒させたままパクパクと口を動かしていた。

そんなユウカちゃんの反応を見た先生がさらに胸の先端を弾く。上へと擦り上げて、下へと擦り下ろして乳首を中心に胸を往復していく。手のひらで乳首をぎゅうううと押しつぶされて、こねくり回されて、びくッびくッとユウカちゃんの身体が跳ねた。

「あ♡ あ♡ あ♡ ん♡ ん♡ ん♡」

先生の手がついにユウカちゃんのお股に向かう。水着の下に手を入れ、大陰唇を擦りながら暴れるユウカちゃんを押さえるように背後から覆いかぶさった。

脚をM字に開脚させ、背後から羽交い締めするように手を伸ばす。オイルを継ぎ足した先生

の手が無造作にユウカちゃんのおまんこに伸びていた。

「やっ♡ んう♡ せんせっ♡」

「ほら、気持ちいいでしょ？ リンパが溜まってるんだよ」

二本の指で筋に沿うように大陰唇をなぞり、水着をずらして指先で撫でまわす。先生の手のひらがクリトリスの上で円を描くようにぐるぐると動き回っていた。

「あー……老廃物が溜まってるね」

先生の長い指がユウカちゃんのおまんこ^{おまんこ}の膣内へと侵入する。水着は既に脱がされていた。左手はクリトリスを刺激したまま、右手の中指と人差し指が、かぎ爪のように曲げられてぐちゅぐちゅと音を立てた。

ユウカちゃんのおまんこはドロドロ口になっている。私も先生の手を真似て、自分のを慰めるけれど、かえってもどかしくなってしまった。

「せんせっ、そこ……ッ♡ リンパじゃない♡ リンパじゃないですっ♡」

必死に脚を閉じようとするユウカちゃん。でも、ガクガクと震える脚は体勢を維持するのに精いっぱい、逃げるように腰を逸らしても先生の手が追いかけてきて逃げ場がなかった。

指の先でぎゅっとクリトリスを押されて、とんとん叩かれて、小刻みに震わされて、緩急をつけて責められている。

その快樂から逃げようとユウカちゃんが身体を動かすことで、逆により深く先生の右手の指

が膣奥に突き刺さるのだろう。

「あっ♡ やっ♡ やっ♡ うん♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ やああ♡」

腰をヘコヘコ動かすユウカちゃんを先生の指がさらに責め立てた。ぐちゅぐちゅとおまんこをかき回す速度が上がって、ユウカちゃんの身体がびーん、と伸びあがった。

「おっ♡ ほっ♡ ほっ♡ オオ♡♡♡♡ オッ♡ イグッ♡ イググ♡♡♡♡♡」

口を目いっぱい開いた大絶叫。失禁したかのようにびちゃびちゃと愛液を垂れ流してユウカちゃんが腰を震わせた。

ガクガクと痙攣してもなお、先生の指は止まらない。膣内から白く濁った愛液を掻き出し、さらにユウカちゃんの身体が大きく震えた。

ぐちゃぐちゃになって、訳も分からなくなったユウカちゃんは——足先までピンと伸ばしてベッドに倒れ込んだのだった。

「ふう……………」

先生がユウカちゃんの身体をベッドに寝かせた。私のおまんこは、とつくの昔にドロドロに出来上がっている。

「じゃあノア、四つん這いになって」

——ああ、次は私の番だ。

ニッコリ笑みを浮かべた先生に従って、ベッドの上で四つん這いになった。ほかほかの卸し